

吉備の兄媛の物語

—『日本書紀』四十番歌謡の考察からその存在意義を考える—

國學院大學兼任講師 大館 真 晴

一 はじめに

本論の目的は、『日本書紀』40番歌謡（以下、紀40歌謡）を含む、吉備の兄媛の物語が、『日本書紀』の文脈の中で果たしている役割や機能といったものを明らかにすることにある。そして、その考察にあたっては、これまでの先行研究において「所伝と歌詞の間にある矛盾」^①と指摘されてきた、歌謡と物語との文脈上の整合性の問題についても再検討を試みるものである。

二 問題の所在

廿二年春三月甲申朔戊子、天皇幸_二難波_一、居_二於大隅宮_一。丁酉、登_二高台_一而遠望。時妃兄媛侍之。望_レ西以大歎。〔兄媛者、吉備臣祖御友別之妹也。〕於是、天皇問_二兄媛_一曰、何爾歎之甚也。对曰、近日、妾有_下恋_二父母_一之情_上。便因_二西望_一、而自歎矣。冀暫還之、得_レ省_レ親歟。爰天皇愛_三兄

媛篤_二溫清之情_一、則謂之曰、爾不_レ視_二親_一、既經_二多年_一。還欲_二定省_一、於理灼然。則聽之。仍喚_二淡路御原之海人八十人_一為_二水手_一、送_二于吉備_一。夏四月、兄媛自_二大津_一發船而往之。天皇居_二高台_一、望_二兄媛之船_一以歌曰、

阿波旋辞摩 異椰敷多那羅弭 阿豆枳辞摩
（淡路島） （いや二並び） （小豆島）

異椰敷多那羅弭 予呂辞枳辞摩之魔
（いや二並び） （よろしき嶋嶋）

儂伽多佐例阿羅智之 吉備那流伊慕塙 阿比瀨菟流慕能。
（誰かた去れ放ちし） （吉備なる妹を） （相見つるもの）
〔『日本書紀』卷十 応神天皇二十二年 三月（四月）

右が今回の考察の対象となる、応神天皇紀二十二年条の吉備の兄媛の物語である。この記述は、応神天皇が難波の大隅宮の

高台に登り遠望したおり、そばに控えていた、吉備の兄媛が西の方角（故郷である吉備の方角）を向いて嘆くところから物語が始まる。応神天皇は、兄媛に対して「どうしてお前はそんなにひどく嘆くのか」と尋ね、兄媛は「近頃、私は父母を思い慕う気持ちでいっぱいです。それで西の方を遠く眺めておりますと、自然と悲しくなってしまうのです。どうか、しばらく故郷に帰って親の面倒をみることを許していただけませんか。」と答える。応神天皇は、兄媛の親を思う心の非常に深いことを愛で「道理においてもつともなことである」と述べる。そして応神天皇は、兄媛を故郷である吉備に帰し、高台に登り、兄媛の舟を遠くに眺め、歌を詠むのである。この吉備の兄媛の物語においては、兄媛の親を思う孝心というものが、応神天皇と吉備の兄媛との別離の要因となっていることを、まず、おさえておきたい。

では、この吉備の兄媛の物語は、現在までどのように論じられてきたのだろうか。この物語について、吉井巖氏は、『古事記』の黒日売と『日本書紀』の兄媛の物語との類似性を指摘した上で、双方の物語は、本来は同根のものであるとし、記紀のそれぞれの物語の相違は、記紀の物語の受容の相違によるものであると指摘した。また、土橋寛氏は、先の吉井氏の説をふまえ以下の様な見解を示す。

『日本書紀』の応神天皇と兄媛の物語は、妃が吉備の豪族の娘であることを含めて、非常によく似ているばかりでなく、「淡路島いや二並び」の歌を、「おしてるや 難波の埼よ」の歌と入れ替えると、『古事記』の物語と歌はぴった

り合うのである。『記』の仁徳天皇と黒日売、『書紀』の応神天皇と兄媛の二つの物語は、従来も指摘されているように、非常に良く似ている。と同時に、どちらの物語も、歌と物語の間に矛盾があるということは、一つの物語から右の二つの物語が派生してきたこと、その過程においてその両方に傷を生じたことを物語っているように思われる。また、大久保正氏は、先ほどの、土橋氏の意見をふまえた上で、次のような意見を述べる。

おそらく、現在の記紀の所伝に定着するまでには種々の付会があり、原形が失われたものと思われるが、原形は吉備臣出身の采女が皇后の嫉妬により、天皇の意に反して郷国に追放されるという物語で、吉備臣の側に伝えられたものではなかったかと思われる。

以上の指摘に代表されるように、吉備の兄媛の物語についての考察は、『古事記』の仁徳天皇の黒日売の物語との関連性の中で、物語の形成論として論じられてきたものが、ほとんどであったといえる。そして、この吉備の兄媛の物語については、吉備の兄媛の物語が『日本書紀』の文脈上で、いかなる役割を担っており、どのように位置づけられるのかといった指摘は、ほとんどなされていなかったといえる。

そこで、本論では、冒頭でも述べたように、応神天皇と吉備の兄媛の物語が、『日本書紀』の文脈の中で、いかなる機能や役割を果たしているのかといった問題を明らかにしていきたいと考えている。また、その考察のなかでは、従来、文脈との齟齬を指摘されてきた（紀40歌謡）が、物語中でどのように位置

づけられ、本当に文脈との齟齬をきたしているのかといった問題もあらためて問い直していきたいと考えている。

三 物語部分の考察

― 応神天皇が兄媛の帰省をみとめなければならない理由 ―

最初に注目するのは、歌謡の前に位置する地の文の部分（以下、物語部分と呼ぶ）である。まず、注目するのは「溫清之情」（傍線①）・「定省」（傍線②）という、故郷にいる親を思う兄媛の心情をあらわした漢語表現である。これらの表現は以下にみる、イ、ウの漢籍にその出典を求めることができる。

イ・凡為_レ人子之禮、冬溫而夏清、昏定而晨省。

『礼記』曲礼上⁽⁶⁾

ウ・孝當_レ竭_レ力。忠則盡_レ命。臨_レ深履_レ薄。夙興_レ溫清。

『千字文』⁽⁷⁾

エ・伏して惟みるに皇帝陛下、天下に臨馭したまふこと、十有餘年、海内清平にして、朝廷に事無し。…中略…誠敬を展べて遠きを追ひ、攀慕惟れ深し。溫清を勤めて顔を承くれば、因心懇に至る。故、九服心を宅して、咸く望雲の慶を荷ひ、万方首を傾けて、俱に就日の輝を承くること有り。

『続日本紀』卷二十一 淳仁天皇 天平宝字二年八月⁽⁸⁾

イの『礼記』の記述は、当該箇所やウ・エにみられる「溫清」という表現のもととなった記述である。この『礼記』の記述には、子が親に対して礼をつくし、孝養をつすく様子が「冬は溫

かにして夏は清しくし、昏に定めて晨に省みる。」とあらわされている。また、この「溫清」という表現は、ウの『千字文』においては、「孝は當に力をくすべし、忠は則ち命を盡くせ。」と記述された後で、「深い淵にのぞむように、また薄氷をふむように恐れ謹んで溫清せよ」と熟語化して用いられている。この『千字文』の「溫清」という表現は、親に孝養をつくす様子を、先程の『礼記』の記述をもとに熟語化させ、「冬は暖かく、夏は涼しいようにして父母に仕えよ」の意で表現されたものと理解できる。また、この「溫清」という表現は、エの『続日本紀』などにおいてもみられ、孝謙天皇の孝養をつくす様子が表現されている。以上の用例から考えると、当該箇所の「溫清」という表現は、兄媛が吉備に残してきた親に対して孝養をつくさんとしている様子を表現したものとして理解できよう。

では、当該箇所の兄媛のように、嫁いだ女性が、親元に帰省し、親に孝養をつくすという行為は、どのようなものとして理解することができるのであろうか。結論を先に述べるならば、この兄媛の行為は后妃の賞賛すべき行為として理解できる。⁽⁹⁾以下に示した、『毛詩』（葛覃）の記述に注目したい。

薄汙_二我私_一、薄澣_二我衣_一。害澣害否、歸_二寧父母_一。〔…前略… 寧安也。父母在、則有時歸寧爾。〕

『毛詩』国風 周南 葛覃⁽¹⁰⁾

右の『毛詩』葛覃の記述には、「父母を帰寧せむ。」とあり、その毛伝には「寧は安なり。父母在れば、則ち時有りて帰寧す」

とある。「帰寧」とは、嫁いだ妻が父母の元にかえり親を安らかな気持ちにさせる行為であると理解できる。また、この『毛詩』(葛覃)の記述は、「詩序」において、「葛覃は后妃の本なり。…帰りて父母を安じ、天下を化するに婦道を以てするなり。」と述べられている。これらの記述から、郷里に帰省して親の面倒をみ、孝養を尽くしたいという、兄媛の行動は、后妃の本たる立派な行いとして理解できる。では、先に見たような兄媛の「孝」というものは『日本書紀』の編纂当時においてどのようなものとして理解されていたのであろうか。「孝」とは、『日本書紀』編纂当時の奈良朝において最も重要視されていた考え方の一つだといえる。論者は以前、『日本書紀』の「孝」について考察を行ったことがある⁽¹²⁾。その際に示した『日本書紀』の「孝」の特徴を掲げると以下のようになる。

一、『日本書紀』における「孝」の用例は、全12例あり、そのうち実に9例は皇位継承の理由や天皇の人物像と関わって使用されている。『古事記』には「孝」の用字例はなく孝と結びついて語られる『日本書紀』の天皇像は『古事記』と比較して特徴的であるといえる。また、『続日本紀』では、「不孝」を理由として廃太子が行われている記述も見られる。『史記』・『漢書』・『後漢書』などにおいても「孝」は、欠くことのできない天子の資質として語られている。

二、『日本書紀』は、「孝」という天皇像を描く際に、『史記』・『漢書』など漢籍の表現を用いることが多い。しかし、『日本書紀』の編者は、「孝」という資質を「孝性純深(綏

靖天皇)」という、直接的な漢語表現だけでなく、会話文を中心とした兄弟の「孝」・「不孝」の対比によって、物語全体においても説明する。

三、天子の資質・そして政策として「孝」を重視する考え方は、漢代において盛んであったものである。『続日本紀』には、中国に倣い国家の方針として「孝」を重視した勅が多数確認できる。『日本書紀』編纂当時の奈良朝が中国の影響を受け「孝」を重要視していたことが理解できる。

以上のことから考えると、故郷である吉備へ帰省し親への孝養をつくすという、兄媛の行為は、たとえ天皇であつても妨げることの出来ない行為として理解でき、天皇としては、むしろ積極的に賞賛すべき行為であつたと理解することができよう。物語中において応神天皇が、「理灼然^{ことばのいいやち}なり(道理においてもつともなことだ)」と述べ、淡路の御原の海人、八十人をつけて、兄媛を吉備に送りかえしたと記述されるのも、「孝」というものを十分に理解した有徳の天皇としての応神天皇の姿を文脈上、位置づけるためになされたものと理解できよう。応神天皇は、このような状況下において吉備へと帰る兄媛の船を見つめ、歌を詠むのである。では、応神天皇の詠んだ歌とは、いったい、どのようなもので、吉備の兄媛の物語内部においてどのような機能を果たしているのであろうか。

四 応神天皇の歌謡の検討 ―文脈との関わりの中で―

では、次に応神天皇の詠んだ(紀40歌謡)について考えてみる。考察の中心となるのは、冒頭で述べたような、歌と物語部

分との文脈上の問題である。では、先に述べたような文脈上の問題とは、(紀40歌謡)のどのような歌表現に起因しているのであろうか。問題となるのは、歌の後半部の「誰かた去れ放ちし」という、応神天皇の心情をあらわした表現である。この「誰かた去れ放ちし」の語義的解釈については、「いったい誰が放し去ったのか」という意で、契沖^⑬以来、ほぼ解釈が一定しているといえる。論者もこの語句の解釈については、従来説をとる立場である。しかし、この「誰かた去れ放ちし」という表現については、物語部分との関わりにおいて、文脈上の齟齬が諸説により指摘されている。まず、土橋氏の指摘である^⑭。

この歌は前文と矛盾することになる。前文では、応神天皇は兄媛の願いを容れて吉備に帰させたのに、歌では誰かが天皇の意思に反して、兄媛を追放したように歌われているからである。したがってこの歌の背景をなす本来の歌物語は、兄媛が天皇の知らないうちに、誰かの手で吉備に追放され、それを知った天皇が淡路島をみて詠んだ歌ということでなければならぬ。

この土橋氏の意見は、『古事記』の黒日売の物語の形成過程というものを念頭に置いたもので、「いったい誰が放し去ったのか」の「誰が」の部分に、かなりの具体性をもたせて、歌と物語部分の関係を理解しようとしたものである。

次に大久保正氏^⑮は、先の土橋氏の見解をふまえた上で次のような指摘をする。

土橋寛氏は、「前文では、応神天皇は兄媛の願いを容れて吉備に帰させたのに、歌では誰かが天皇の意思に反して、

兄媛を追放したように歌われている」ことを疑問とし、所伝と歌詞の間にある矛盾を指摘している(『古代歌謡全注 歌日本書紀編』。「もと歌は、内海船の舟人の歌であるかもしれない」『記紀歌謡集全講』とか、「瀬戸内海を航行する水手などの間で歌われた民謡風のものが原形」『記紀歌謡評釈』かというような解釈が生じる理由もそこにある。しかし、自分が帰郷を許しておきながら、去りゆく船を目前にして、だれかが二人を引離したように歌うということも、いわゆる喚情的言語としてはあり得ないことではない。…中略…そして『書紀』に、応神天皇が、兄媛の孝心を賞して帰国を許したというのは、『書紀』の儒教的・仁政的思想に基づく潤色で、そこに歌詞との齟齬が生じたもののように考えられる。

※(傍線筆者)

この大久保氏の見解は、先の土橋氏と同様に歌詞と物語部分との間に、文脈上の矛盾があると理解するものである。そして、大久保氏は、その文脈上の矛盾の理由を、『日本書紀』の「儒教的・仁政的思想に基づく潤色」によるものとする。確かに「孝」という儒教道徳に基づく潤色が物語部分においてなされていることは、先に述べたとおりである。しかし、論者は、「孝」という儒教道徳に基づく潤色がなされているにも、物語部分と歌とは、なんら矛盾することはないと考えている。それよりもむしろ、この物語部分の文脈における「孝」という要素は、応神天皇の有徳の天子像の造形というものにむかって、歌と物語部分との間を密接に結びつけ、有効に機能させているのではないかと考えている。このことについては、後に触れることとする。では、

先ほどの大久保氏の説についてであるが、この説には、他に注目すべき点がある。それは、「去りゆく船を目前にして、だれかが二人を分離したように歌うということも、いわゆる喚情的言語としてはあり得ないことではない」との指摘である。

この大久保氏の見解は、これまでの先行研究には見られない重要な指摘であるといえるが、残念ながら根拠の提示がなく、その指摘の妥当性が確認されないでいる。そこで、今回の考察では、大久保氏の示した指摘を手がかりとして、その指摘の検証を行い、問題となる歌謡の後半部の表現をさらに踏み込んで考えてみたいと考えている。

造媛、遂に心を傷るに因りて、死ぬるに致りぬ。皇太子、造媛徂逝ぬと聞きて、愴然傷怛みたまひて、哀泣みたまふこと極めて甚なり。是に、野中川原史満、進みて歌を奉る。歌ひて曰はく、

山川に 鴛鴦二つ居て

偶よく 偶へる妹を 誰か率にけむ 其一 (113)

本毎に 花は咲けども

何とかも 愛し妹が また咲き出来ぬ 其二 (114)

皇太子、慨然頽歎き褒美めて曰はく、「善きかな、悲しきかな」といふ。乃ち御琴を授けて唱はしめたまふ。絹四匹・布二十端・綿二廻賜ふ。

『日本書紀』卷二十五 孝徳天皇 大化五年三月

まず、注目するのは、右に掲げた、(紀113歌謡)である。この歌謡は、造媛の死にあたって、夫である皇太子・中大兄皇子が大いに痛み悲しみ。野中川原史満が、その中大兄皇子が悲し

む様子を見て歌を作り、中大兄皇子に奉ったものである。

この歌謡では、「山川に 鴛鴦二つ居て」と、前半部にたぐい良く並んでいる一対のオシドリの様子が描かれており、後半部はその前半部の景を受けた心情部ということになる。『日本書紀』の文脈に照らし合わせるならば、一対のオシドリは中大兄皇子と造媛夫婦の比喻ということになり、「誰か率にけむ(いったい誰がつれていったのだろうか)」という部分は、造媛との死別に対する中大兄皇子の悲しみを詠んだものとして理解できる。この歌の構造は、今回、問題とする(紀40歌謡)のものと大変類似しているといえる。特に注目すべきは造媛との死別を痛む表現としてなされた、「誰か率にけむ(いったい誰がつれていったのだろうか)」という表現である。この「誰か率にけむ」という表現は、「誰か」の部分に実体性がもたされた表現とは考えにくく、「いったい誰が」という部分に具体性をもとめて理解するよりも、造媛との死別という、二度と会うことの出来ない別れの悲しみをあらわすのに重点を置いた表現だと理解するほうが妥当であろう。そして、「いったい誰がつれていったのだろうか」と述べる嘆きからは、「本来なら、今でも、造媛いつしよに並んでいたかった」という、現状でも、なお残る造媛への強い思いを読み取ることが出来る。また、『日本書紀』の文脈によると、この歌が詠まれた時点では、造媛は、すでに死んでおり、歌の詠み手もそのことを知っていたことになる。当然、歌の詠み手は、自分の理想とする「一緒にたぐいよく並ぶという」行為が、実現不可能であることを認識しているのである。つまり、この「誰か率にけむ」という表現は、「誰か」

という部分に具体性を求めて理解するよりもむしろ、「たぐいよくいる」という、自分の望む状況が不可能になった詠み手が、その状況を歎き、そこで対象のことを強く思った恋情表現だと理解したほうが妥当なのではないだろうか。

この例から当該の（紀40番歌謡）の「誰かた去れ放ちし」という表現について考えてみる。当該歌の「誰かた去れ放ちし（一体誰が引離したのか）」と述べるところからは、「本来なら、今でも引離されずに兄媛と一緒にいたい」という応神天皇の理想とする状況を読みとることができる。しかも、歌が詠まれた時点で、すでに兄媛は吉備に旅立っているのである。問題とする「誰かた去れ放ちし」という表現も、先程の「誰かいにけん」と同様に、「誰か」という部分に具体性を求めて理解するのはなく、自分の理想とする状況にいられなくなった、応神天皇が当面の現状を歎いたものだといえるであろう。この「誰かた去れ放ちし」という表現も、先程の（紀113歌謡）と同様に、自分のもとから去っていった相手のことを強く思う恋情表現だと理解できるのではないだろうか。

また、先にみたような、自分の望む状態になっていない現状を嘆き、それにより対象のことを強く思うという歌表現のありようは、以下に考察する「相みつるもの」の「もの」という語句からも裏付けることができる。以下の資料に注目したい。

・上代文献における「もの」

〈記紀歌謡〉

- a 多遲比野に 寝むと 知りせば 防壁も
母知^{持ちて}弓許麻志^{まし}母能^{もの} 寝むと知りせば (記75)
- b 引田の 若栗栖原 若へに
韋泥^{率寝て}弓麻斯^{まし}母能^{もの} 老いにけるかも (記93)
- c 嬢子の い隠る岡を 金鉏も
五百箇^もがも 須岐婆奴流^{すきばぬる}母能^{もの} (記99)
- d 淡路嶋 いや二並び 小豆嶋 いや二並び
よろしき嶋嶋 誰かた去れ放ちし
吉備なる妹を 相見つる慕能^{もの} ※当該歌謡（記40）

〈万葉集〉

- e 天飛ぶや 鳥にもがもや 都まで
送りまをして 等比可弊流^{飛び帰る}母能^{もの} (5¹⁷ / 0876)
- f 我が持てる 三相に搓れる 糸もちて
附手益物^{付けてましもの} 今ぞ悔しき (4 / 0516)
- g 伎倍人の まだら衾に 綿さはだ
伊利奈麻之母^{入りなましもの}乃^の 妹が小床に (14 / 3354)

・万葉集における「ものを」（歌末で使用させるもの）

※「まし」が上接するものは除く

- アぬばたまの その夜の梅を
た忘れて 折らず来にけり 思之物^{思ひしものを}乎 (03 / 0392)
- 伊陸奥の 真野の草原 遠けども
面影にして 所見云物乎^{見ゆといふものを} (03 / 0396)

ウ今よりは 城の山道は さぶしけむ

我が通はむと 念^{思ひしものを}之物乎

(04 / 0576)

エ霰降り 鹿島の崎を 波高み

過ぎてや行かむ 戀^{恋しきものを}敷物乎

(07 / 1174)

才秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに

我れは物思ふ 都礼無物乎^{つれなきものを}

(10 / 2247)

上代文献における「もの」の用例は、記紀歌謡で4例・万葉に3例確認できる。これらの「もの」の用例は、反実仮想の「まし」、希望を表す「もがも」を伴って使用される例が多いといえる。まず、aについてであるが、aは反実仮想の「まし」を伴って詠まれる例で、「多遅比野で寝ることをあらかじめ知っていたなら、防壁^{たづも}をもつてきたのに」という、本来なら「防壁^{たづも}を持っている」という状態を望んでいたが、現実ではそうではないという状態を歎いたもので、防壁^{たづも}に対する詠み手の強い執着心が読み取れる例である。bは雄略天皇が「引田の若くる林のように、若い時分に赤猪子と共寝ができたならよかったのに」と詠嘆するもので、本来なら赤猪子が若い時分に共寝をしたかったが、現在に至っては赤猪子が年老いており、それも不可能であると詠んだものである。ここにも、本来なら共寝をしたかったという雄略天皇の赤猪子に対する強い心情が含まれているものだと理解できる。cは、希望をあらわす「もがも」を伴って「もの」が歌いこまれる例である。この例は、「金の鋤が何百本もあったならなあ 乙女の隠れている岡を すきはねてしまうのになあ」と解されるもので、「金の鋤が何百本

もあるという」状態が理想であったが、それが実現されていないのが現状であり、その鋤が無いという現状を嘆くことで、目にするこのできない乙女のことを強く思った例だと理解できる。eの万葉歌も「もがも」をともなつて「もの」が詠みこまれる例で、鳥になれず、相手を都まで送って飛んで帰ってこれない自分の現状を嘆き、そのことを歌に詠むことで、相手と極力一緒にいたいという心情を詠んだものである。f・gは反実仮想の「まし」を伴って詠まれる例で、fは、本来なら三よりの糸でつけてきたかったのだが、それは出来なかったというもので、gはあの子と床に入りたかったが入れなかったという現状を詠むことで、恋人のことを強く思った例だといえる。このような「もの」が歌いこまれる歌においても、「詠み手が理想とする状態があるものの、その理想とする状態が実現不可能であり、その実現不可能な状況を詠むことによって、対象を強く思う」という心情が読み取れるといえる。しかし、その例のほとんどが、反実仮想の「まし」や、希望をあらわす「もがも」を伴うものである。当該歌には反実仮想の「まし」も希望をあらわす「もがも」もみることとはできない。そこで、さらに「まし」も「もがも」も含まない例においても、先にみたような心情がよみとれるかどうか確認してみたい。その考察にあたつては、「ものを」という表現に着目し考察を加えてみる(「まし」や「もがも」を伴わず使用される「もの」の用例は、記紀・万葉集において当該箇所^のの紀40歌謡のみである)。

「ものを」は、先程の「もの」に「を」(文末にあつて文の確認を表し、詠嘆の意を添える助詞)が加わったものとして理解

できる。この「ものを」の場合も、先程の「もの」の場合と同様に、反実仮想の「まし」を伴なって使用される例が非常に多いといえる。また「ものを」の使用例は記紀歌謡には見ることができない。今回の考察では、当該歌謡と使用状況の近似した、歌末で使用され、「まし」や「もがも」が使用されていない「ものを」を考察の対象とした。

アの例は「ぬばたまの夜に咲いていた あの花を すっかり忘れて た折らずにきた かねてから折ろうと思っていたのになあ」と解されるもので、本来なら、折ってきたけれども、折ってくることはできなかったという現状を読むことで、梅という対象を強く思った例だと理解できる。イは「陸奥の真野の草原は遠いけれども面影としては見えるといひますものを」とあり、これは、面影すらも見えないという状況を詠むことで、見えない対象のことを強く思った例だと理解できる。エは立ち寄れない現状をなげくことで、立ち寄りたい対象を強く思った例だと理解できるものである。以上のような、「まし」も「もがも」を伴なわない「ものを」の用例も合わせて考えてみると、当該歌の「もの」は、自分の望む状態でないことを詠むことによって、対象を強く思った例だと理解できる。

このように、「もの」という語句の持つ表現性をあわせて考えてみても、当該歌の後半部の表現は、本来なら吉備の兄媛と今でも睦みあっていたのに、今は引離されてしまつて睦み合うことは出来ないという、応神天皇の歎くべき現状を詠むことで、今でもなお残る兄媛への強い恋情を示したものと理解できる。つまり、この歌謡の把握において、「いったい誰が」

という部分に、従来説のように具体性をもとめて理解する必要性はそれほど無いといえるのである。それよりも、むしろ、「誰かた去れ放ちし…」という表現は、別れて睦み会うことが出来なくなつてもなお残る、兄媛への強い恋情を表現したものとして解すべきではないだろうか。

では、ここで当該歌についてのまとめをおこなうこととする。「誰かた去れ放ちし…」をこれまで述べてきたように理解するならば、淡路島と小豆島が並んでいる様子が「宜しき島々」とよみこまれる前半部は、応神天皇の理想とする状態が景として詠みこまれたものとして理解でき、応神天皇が兄媛と仲良く二人並んで睦みあっている姿の比喻として理解できる。そして、問題となる後半部の「誰かた去れ放ちし…」という表現は、吉備の兄媛と「睦みあうことはできない」という、実現不可能となつた応神天皇の理想的状态を詠み込むことで、今でもなお残る兄媛に対する強い恋情を表現したものと理解できよう。以上のような見解をふまえ、当該歌全体の解釈を示すと以下のようなになる。

淡路島と小豆島は美しく二つ並んでいて、好ましい島島だ（そのように私と兄媛も二人寄り添つて並んでむつみ合つていた。）それなのに、いったい誰が二人を引離してしまつたのか、吉備の国の妹（兄媛）とむつみあっていたのになあ。（今でも兄媛のことを強く思っている。）

五 歌謡と物語部分とのつながり

― 私愛と公義 ―

では、先に述べたような、歌の理解に立つと、歌と物語部分

との関連性は、どのように理解できるのであろうか。まず、先ほどの歌謡の考察でみた、兄媛と別れてもなお残る、兄媛への強い恋情というものを、物語部分に還元させて考えてみる。そうすると、応神天皇は兄媛に対して、強い恋情を抱いており、その強い恋情を抱きながらも、「孝」という儒教道徳を優先させたものだと理解できる。この場合、応神天皇の兄媛に対する思いが強ければ、強いほど、その強い恋情を断ち切って、「孝」という儒教道徳を優先させたという応神天皇の有徳性は高まるといえる。(紀40歌謡)は、この応神天皇の強い恋情を物語内部において説明するのに有効に機能しているといえるのではないだろうか。また、ここで述べた「孝」という徳目は『日本書紀』編纂当時の奈良朝において、もつとも重要視されていた徳目であることは先に述べたとおりである。つまり応神天皇は、個人の心情よりも「孝」という公の道徳を優先させた天皇であるということになる。

このような、個人の心情より公の道徳を優先させるという天子の姿は、以下に示した漢籍に見ることが出来る。

①『漢書』(卷八十六 何武王嘉師丹傳第五十六・王嘉)⁽¹⁹⁾

孝成皇帝時、諫臣多言下燕出之害、及女寵專愛、耽二於酒色一、損レ德傷レ年上、其言甚切、然終不二怨怒一也。…中略…
不下以二私愛一害上公義一、故雖レ多レ譏、朝廷安平、傳二業陛下一。

※「私愛」とは『列女伝』(蓋将之妻)に「妻子、私愛也。」とある。

②『藝文類聚』(第三十六卷 人部二十 隱逸 上)⁽²⁰⁾

嵇康高士傳曰 ……中略… 子高曰、昔堯治二天下一、至公無私。

③『資治通鑑』(卷第一百九十二 唐紀八 高祖神堯大聖光孝皇帝下之下)⁽²¹⁾

上曰、王者至公無私、故能服二天下之心一。

まず、①の『漢書』についてである。①は漢の孝成皇帝の振る舞いについて述べたもので、孝成皇帝は燕出の害(天子のしのび歩きの害)、女寵を専愛する行為などによって、臣から、しばしば痛切な言葉で諫められたことがあったが、皇帝はついに怨怒することがなかったことが語られる。そして、そのような孝成皇帝は「私愛をもつて公義を害しなかつたので、譏り(婦人を好むことへの)が多くのあるながらも朝廷は安泰で、大業を孝哀帝に伝えることが出来た」と語られている。

そして、②の『芸文類聚』の引用する「嵇康高士傳」には、聖帝である堯の治世が「至公無私」であったと記されている。③の『資治通鑑』は、『日本書紀』より成立が下った書物であるが、そこには、唐の太宗の発言として(文中における「上」は太宗を指す)、「王は至公無私だからこそ、天下の心が服従するのだ。」というものが見える。このような、「私」をすてて「公」を優先させるという理念は『日本書紀』の記述においても見ることが出来る。それは以下に示した顕宗天皇・仁賢天皇の姿である。

皇太子億計、歔歔きて答ふること能はず。乃ち諫めて曰はく、「不可。大泊瀬天皇、万機を正し統ねて、天下に臨み照らしたまふ。華夷、欣び仰ぎしは、天皇の身なり。吾が父の先王は、是天皇の子たりと雖も、迤邐に遭遇ひて、天

位に登りたまはず。此を以て觀れば、尊卑惟別なり。而るを忍びて陵墓を壞たば、誰を人主としてか天の靈に奉へまつらむ。其の毀つべからざる、一なり。

『日本書紀』卷十五 顯宗天皇二年八月

右の記述は、『日本書紀』の顯宗・仁賢天皇の物語である。ここには、父の仇である雄略天皇の陵墓を一かけらも壞すこともなく、億計王が雄略天皇の陵へ赴くことすらもない顯宗・仁賢天皇の姿が描かれている。『古事記』では仁賢天皇は雄略天皇の陵に赴き、陵を一かけら分だけ壞している。そして、傍線部で示した仁賢天皇の「雄略天皇は天下の政治を正しく受継ぎ、天下をおさめたのです。万民が喜び仰いだ天皇です。しかし、吾等の父は天皇の御子ではあったが困難にあい天位につきませんでした。これをみれば身分の違いは明らかです。」という発言からは、恨みという「私」の感情よりも、天皇としての「公」の論理を重んじた顯宗・仁賢天皇の姿が読みとれる。

当該箇所は吉備の兄媛の物語では、このような「私」を捨てて孝という「公」の論理を優先させる、有徳の天子としての応神天皇の姿が、物語と歌との組み合わせによって、みごとに造形されているといえるだろう。そして、(紀40歌謡)は、応神天皇の兄媛への思いという個の感情を表現するのに、実に有効に機能しているといえるであろう。

五 おわりに

本論は、(紀40歌謡)を中心とする、吉備の兄媛の物語が『日本書紀』の文脈上で果たしている役割を明らかにせんとして考

察を行ったものである。そして、その結論としては、吉備の兄媛の物語は、「私」をすてて「孝」という公の道徳を優先させる、有徳の天子としての応神天皇の姿を『日本書紀』の文脈上で位置づけるためにあると結論付けた。(紀40歌謡)は、そのような物語の中にあつて、応神天皇の強い恋情という個の感情を表現するのに、実に有効に機能しているといえるのである。『日本書紀』は「私」をすてて、「孝」という公の道徳をとる応神天皇の姿を、物語部分における漢籍による潤色と歌謡との組み合わせによって見事に描き出してきているのである。論者は、この文飾と歌謡との組み合わせによる表現方法という部分に、『日本書紀』の新たな人物造形の方法が見い出せるのではないかと考えている。

〔注〕

- (1) 大久保正氏『講談社学術文庫 日本書紀歌謡 全訳注』昭和五十六年八月 講談社。
- (2) 『日本書紀』の引用は日本古典文学大系『日本書紀 上・下』(岩波書店)に拠り適宜、改めた個所もある。
- (3) 吉井巖氏『天皇の系譜と神話 一』「応神天皇の周辺」昭和四十二年十一月塙書房。
- (4) 土橋寛氏『古代歌謡全注釈 日本書紀編』〔考説〕昭和五十一年八月 角川書店。
- (5) (1)に同じ。
- (6) 『礼記』の引用は、『十三經注疏』所収『禮記正義』(中華書局出版・新華書店北京發行所發行)に拠った。但

し新字に改めた箇所もある。

- (7) 『千字文』の引用は、小川環樹・木田章義注解『千字文』（岩波文庫）に拠った。

- (8) 『続日本紀』の引用は、新日本古典文学大系『続日本紀』（岩波書店）に拠った。

- (9) また『文選』（宋文皇帝元皇后哀策文）には、親への「孝」をつくした宋の元皇后を称えた文章が載せられている。また、この「孝達寧親（孝は寧親に達し）」：「という表現に対して、李善注は『毛詩』（葛覃）の記述を引用し父母を安心させ親への「孝」を尽くすことの意義を述べている。『毛詩』（葛覃）は本論においても引用した。

- (10) 『毛詩』は『十三經注疏』所収『毛詩正義』（中華書局出版）に拠った。

- (11) 『日本書紀』には、兄媛と同様に、親元に帰省し親に孝養をつくさんとする人物として、継体天皇の母である振媛が登場する。この振媛の「孝」については、拙論「継体天皇即位前紀にみる振媛の会話文―『釈日本紀』所引『上宮記』との比較から―」（『國學院雑誌』一〇五巻（五号）平成十六年五月）において既に触れた。

- (12) 拙著『『日本書紀』の作品論的研究―人物造形のあり方を中心に― 國學院大學大学院研究叢書 文学研究科

10』（國學院大學大学院）平成十五年十月

- (13) 『厚顔抄』（『契沖全集 第七卷』岩波書店、昭和四十九年八月）

- (14) (4) に同じ。

- (15) (1) に同じ。

- (16) 『古事記』の引用は、新編日本古典文学全集『古事記』（小学館）に拠った。

- (17) 『万葉集』の引用は、日本古典文学全集『万葉集』（小学館）に拠った。

- (18) 参考として、以下の万葉歌にも注目したい。

我妹子に 我が恋ひ行けば 羨しくも 並び居るかも
妹と背の山 (07/1210)

右の万葉歌は、二つ並び立っている山の様子を、「妹と背の山」と男女が仲睦まじく並んで立っている様子に比喻したものである。そして、歌の詠み手は、並び立つ二つの山の様子に対して「羨しくも」と詠んでいる。

この万葉歌などから考えてみても、（紀40歌謡）の表現は、二並びする淡路島と小豆島を、男女（当該歌では仁徳天皇と兄媛）が並んでいる様子に比喻したものだと考えられる。応神天皇は、その二並びする島々の様子をみて「よろしき島々」といったのであろう。

- (19) 『漢書』の引用は、『漢書』（中華書局出版・新華書店北京發行所發行）に拠った。

- (20) 『芸文類聚』の引用は、『芸文類聚 上・下』（上海古籍出版社）に拠った。

- (21) 『資治通鑑』の引用は、『資治通鑑』（中華書局出版・新華書店北京發行所發行）に拠った。